

O^お
i^い
y^や
a

医者に
ダマされた、
なう。

青山ライフ出版

はじめに

ボクがこの本を出版しようと思ったきっかけはある知人の作家さんから医療の不満話を聞いたことだった。

その作家（Kさん）は左目の視野に異常を感じ、縦に太い黒い線が見えるので不安になって、眼科を受診したという。そこでドクターに言われたのが、「病気じゃないから、薬は出せない」これがKさんには納得できなかったらしい。視野欠損は交通事故にもつながる重大な障害であることは、一般の方でも容易に理解できるであろう。実際見えないんだから治してほしい、何らかの治療の手だてはしてほしいというのが患者の心理。一応、検査はしてもらったらしいが、検査項目は白内障と緑内障。…緑内障は視神経にダメージを与えることから検査は必要であろうが、白内障？ そんな症状はないのに検査されて、薬は結局貰えず、検査費用で3,000円くらい取られたらしい。お金は取られて、症状はそのまま、「病気じゃないから」と説得されて帰されたものの、納得がいかず、ボクにその話をしてくれたのである。

そこでボクは医療の裏側の話をした。検査は儲かる、だから初めて行った病院であればどの科にかかっても何らかの検査はされる。そして、薬が出せないというのは病名がつかないから。本文の中で後述するが、薬というものはそれに対応する病名がつかないと処方できないことになっている。そして、その視野欠損は、病気ではないというよりも、その医師が知っている病気にそういうものはない。要するに病名が分からないのである。だから薬が出なかったんですよと説明すると、なるほどと理解して頂いた。ただ、こういった医療の裏側は一般の生活者には分かりにくい。だから、それを一般の生活者に分かるように本を書いてくれ、といわれたのである。

作家の先生から「本を書いてくれ」といわれるのはいささか妙な気分になったが、確かに本書の必要性はあるなと思ったのである。

医療と言っても日本の医療はほとんど保険医療のため、「レセプト」という面倒くさい代物が存在する。この「レセプト」とは医師であれば病名をつけて、保険医療で点滴だの投薬だの検査だのをするために保険診療を認めてもらうための行政が作った実に面倒くさい制度である。このレセプトの審査が通らないと、保険がきかなくなる。

具体的にどういうことかということ、先のKさんの場合、3割負担で3,000円を支払っている。ということは10割（全額）で10,000円の医療費がかかったということ。病院としては3割は患者に請求できるが、残りの7割は保険組合、支払い基金などの機関に請求する。これをレセプトというのである。そしてレセプトの審査を切られた場合、その残りの7割は入ってこない。病院の収入は激減するのである。3割でもとが取れるわけないからその患者については赤字になる。だから医者にはレセプトで切られるのを極端にいやがる。

後述するが、医療業界というのは矛盾の塊で、A病院ではレセプトが通過するのにB病院で同じ検査や投薬をするとレセプトで切られるというケースがあるということ。つまり、レセプトとは、保険適応になるかどうかの判断（実際に判断するのは社保や国保の担当者たち）なのだが、実は公平でないのである。この摩訶不思議な病院や調剤薬局の実態を正確に知っている人は少ない。そこでボクはチクることにした。一般の生活者の皆さんに。医師と薬剤師と看護師のウソ、本音をばらしちゃおう。では摩訶不思議な旅のはじまりはじまり～。

平成 25 年 4 月吉日

◆◆◆目次

はじめに	2
第1節 医師は本当に偉いのか？	6
第2節 医師に殺されかけた著者o-ya	8
第3節 転機	11
第4節 はやるヤブ医者	15
第5節 それでも医者は偉いかも	18
第6節 医師はドクターかビジネスマンか	21
第7節 レセプトの理不尽	25
第8節 なぜ医師はたくさん薬を出したがるのか？	28
第9節 調剤薬局のからくり	32
第10節 モラルハザードの病院内処方	42
第11節 多剤処方の実際	45
第12節 手術の成功率のからくりはこうだ	48
第13節 処方箋で貰った薬の法的特性	49
第14節 ジェネリック医薬品って、 本当にもとの薬と効果が同じなの？	54
第15節 薬剤師はピンキリ	57
第16節 セルフメディケーションって何だろう？	58
番外編	60
おわりに	64
<参考図書>	65

医者にダマされた、なう。

第1節 医者は本当に偉いのか？

医師と言えば、受験でも最難関とされる医学部（東大だったら理科Ⅲ類）に入学し、6年間の学習と訓練を経て医師国家試験に合格した、いわば理系のエリート中のエリートである。あの白衣姿に誰もが畏怖の念を抱き、医師の言うことは何でもきく、といった患者は多い。最近でこそ、医療ミスの訴訟があちこちで起こっており、医者への権威というのも昔と比べれば多少落ちたのかなとも思うが、それでもやっぱり、医者と言えば「偉い人」なのである（少なくとも日本人の中では）。

じゃあ、「偉い人」の定義って何だ？ 簡単に言うとステータスの高い職業に就いている人、つまり、「先生」って呼ばれる人のことだろうか。特に医者は高収入の職業でもある。いっぱいお金を稼ぐってことはやっぱり「偉い人」なんだろうか。

医師のほかにも、国会議員、弁護士、司法書士、税理士、公認会計士、大学の教授、学校の先生など、先生と呼ばれる職業はたくさんある。ボクみたいな薬剤師でもたまに先生と呼ばれることがある。フフン、俺先生なんだ、などとちょっといい気になってみたりする。が、しかし！ そんなときふと思ってしまう。「あ、俺先生なんだ。偉いんだ。って、ん～あれ？ ホントにボクは偉いかあ？」自問自答するが、大して偉くないよね、という結論になる。今までも本は何冊か出しているけど薬剤師ってなんだか中間管理職的な微妙なポジションだし、どうもボクのような輩を客観的に観察していると一応先生とは呼ばれるんだけど、別に偉いというわけではないような気がする。収入が少ない多いで言うと、まあ、通常のサラリーマンよりはちょっとはいいかもしれないが、かといってがっばり稼いでいるわけでもない。クルマキチガイのボクとしては収入が十分であれば本当はレクサスに乗りたけれど、実際のところプリウスでいっぱいいっぱいである。

そうか、そうするととりあえず高収入の人は「偉い人」なのかもしれない。でも、どうもしっくりこないなー、この結論。これだと無条件で医師は「偉い人」って事になる。これはもうちょっと医者 of 生態というものを暴いていかねばならんようである。